九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ベトナム語母語話者の日本語語彙学習ストラテジーに関する基礎研究

天野，裕子

https://hdl.handle.net/2324/4784713

出版情報：九州大学，2021，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	天野　裕子
論　文　名	ベトナム語母語話者の日本語語彙学習ストラテジーに関する基礎研究
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　志水　俊広 副　査　　九州大学　　教授　　松永　典子 副　査　　九州大学　　教授　　郭　俊　海 副　査　　九州大学　　准教授　　李　暁　燕 副　査　　九州大学　　准教授　　伊藤　崇達

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は、ベトナム語を母語とする日本語学習者の語彙学習ストラテジーの使用傾向を記述し、ストラテジーの使用と日本語の習熟度、学習歴、心理的要因である動機づけや目標指向性との関連を解明したものである。

語彙学習は外国語学習の重要な要素であり、知っている語彙が少なければ、「読む・聞く・書く・話す」という四技能のいずれも十分に発揮できない。しかしながら、教師が語彙の全てを教授することは難しく、学習者自身が語彙学習を自発的に進めていくことが重要となる。そこで、注目されるのが学習ストラテジーである。一般的に、学習ストラテジーとは学習を容易にするために学習者が選ぶ行動や思考を指す。学習者それぞれが適切な語彙学習ストラテジーを使用することで、語彙学習の苦労は軽減され、学習者は自律的に学習を進められると考えられる。語彙学習ストラテジーの使用傾向や関連する要因が解明されれば、日本語の語彙学習のプロセス解明に繋がり、学習者支援に活用可能であろう。

しかし、ベトナム語母語話者においては、ベトナム語の特性から日本語の語彙全体の習得プロセスや語彙学習ストラテジーの使用傾向が非漢字圏や漢字圏の学習者のものとは異なると考えられるものの、ベトナム語母語話者に対象を限定した日本語の語彙学習ストラテジーがこれまでに見られず、使用傾向やそれと関連する要因が明らかにされていなかった。そのため、本研究では、以下の4つの課題を設定し、ベトナムの高等教育機関に所属する学習者を対象に、量的調査と質的調査を行うことにした。

1) ベトナム語母語話者はどのような語彙学習ストラテジーを使用しているのか。
2) 日本語の習熟度が高い学習者と習熟度が低い学習者とで、語彙学習ストラテジーの使用傾向は異なるのか。
3) 学習歴が異なる学習者では語彙学習ストラテジーの使用傾向は異なるのか。
4) 語彙学習ストラテジーと動機づけ、目標指向性には関連が見られるのか。

本論文は全7章で構成される。第1章では、本研究の背景と目的、対象、構成を述べた。第2章では、本研究に関連する先行研究を概観し、研究の枠組みと位置づけを示した。第3章では、第2章を踏まえて研究課題を設定し、用語の定義や研究方法を示した。

第4章では、研究課題1と2に応えるため、語彙学習ストラテジーの質問紙調査と日本語の習熟度テストを行った。その結果、相対的に見て、社会的ストラテジー（記憶強化）と記憶ストラテジーよりも、決定ストラテジー、社会的ストラテジー（意味）、認知ストラテジー、メタ認知ストラテ

ジーをよく使用する傾向があることがわかった。また、上位群と下位群の差異について検討を行ったが、ストラテジーのカテゴリーでは差が見られないという結果となった。参考までに行った、質問項目についての分析では「日本語の国語辞典を使う」にのみ有意差が見られた。

第5章では、研究課題1と3に応えるため、学習歴2.5年以上の学習者4名と学習歴6カ月程度の学習者3名へインタビュー調査を行い、量的調査では明らかにしづらい使用傾向や関連する要因について記述した。傾向としては、新しい語彙の意味を知る場合にしても、語彙を覚える場合にしても、学習歴が長い日本語学習者は、自身の学習状況や辞書などのツールの長所と短所、学習目標を自身で把握できており、その分析をもとに自身の専門や興味に合わせて学習計画を行うことができていた。その一方で、学習歴が短い学習者たちもまたそれぞれ工夫して語彙学習ストラテジーを使用していたものの、記憶しようとする語彙は授業内に提示されたものにとどまっており、授業外の自主的な語彙学習はできていなかった。

第6章では、研究課題3と4に応えるため、複数の教育機関において、語彙学習ストラテジー、動機づけ、目標指向性という3つのパートからなる質問紙調査を行った。学年による差異については、3つの学年で有意差が見られたのは、決定ストラテジーのみであり、1年生と比べて2年生と3年生の平均値が高かった。2年生以降、学習する語彙の量や難易度に大きな変化があることに加え、日越辞書の情報が不足していることから、このような差が生じると考えられる。さらに、語彙学習ストラテジーと動機づけ、目標指向性の関連を明らかにするために、共分散構造分析を行った。その結果、語彙学習ストラテジーと外発的動機づけには関連が認められなかったが、自己決定レベルの高い内発的動機づけと未来への長期的な展望である目標指向性については関連が見られることが明らかになった。

最後に、第7章では、4つの調査の結果から総合的考察を行い、それをもとにして教育現場への提言を行い、研究の意義と今後の課題について述べた。

以上のように、本論文はベトナム語母語話者の日本語語彙学習ストラテジーを様々なデータから実証的に明らかにしようとしたものであり、貴重な知見を提供してくれるものとして評価でき、第二言語習得理論および日本語教育の分野において価値ある貢献となるものである。よって、論文調査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。